

---

# INSANITY

咲魔@テラ駆け出しドンだー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

INSANITY

### 【著者名】

N-ONE

【あらすじ】  
咲魔@テラ駆け出しどンだー

とある世界からふたたび帰ってきた青年の笑いあり恋愛ありはたまたシリアルスアリの日常!  
さて、彼にはどんな運命が待っているのか!!

ゆっくりまつたつとお送りする咲魔初の一次小説です!!!

## プロローグなんて無かった（前書き）

あい、初の一次小説です… 楽しんでくださいーーい（^\_-^）／

## プロローグなんて無かつた

秋吉夜哉は今年で五十歳になるのだが、外見は二十歳の時となんら変わつてはいなかつた。それは、三十年前、彼は妖怪となつたからだ。

しかし、今こうして又しても現代社会に溶け込んでひつそりと、またまつたりと人間の側でくらしている。

彼は、戸籍上では死人の扱いである。彼がとある世界に旅立つた時、既に行方不明とされ、三十年間発見されず、死んでいふとされたのはつい最近、気まぐれで死亡の偽装をしたからだ。

そういうえ、彼が現世に舞い降りたのはおとといの事である。前の世界が、とても清んだ空気が駆け巡つていたので、帰つてきた時は若干噎せた。やはり、科学技術の発達と大気汚染の関係は比例の関係にあるのだろうか。そう思わずにはいられないのである。

彼は今、ゲームセンターに居る。なんのことはない、長年の友人（だと彼は思つてゐる。）が好んで飲んでいたビールを傾けながら、久々のゲームセンターの感覚に酔いしれていたのだ。

代金はどうするのかと思つだらうが、彼は行動が早い。先生という職業に着きたかつたが、長年の勉強不足（といつても、頭の良さは健在だが。）と、自身の妖怪化に伴い、それを切り捨て、取り敢えずコンビニエンスストアでアルバイトをすることにした。

彼は、ダンスダンスレボリューションなる音ゲーをしている。まあ、知る人ぞ知る音ゲーであるのだが。

今のコインで本日五回目になる。

なかなかこのゲームセンターはダンスダンスレボリューションの人気は高く、人が何人か並ぶのだが、並んでるときはビールを飲んでゐる。何故か酒臭くならないのは不思議である。

さて、四曲田も終了し、時計を見た。

「やべ。 バイトの時間ちけえ。」

ダッシュでゲームセンターを抜ける。この時間帯は、人が多いのが、かなりの速度で走ってるにも関わらず、誰一人として接触はない。

「あー、やべえやべえ。」

余裕の表情で、その言葉はおかしいと思うが。

それはおいといて、ゲームセンターからバイト先までは一キロで、残り時間一分五秒。

「さて、行きますか。」

歩道を駆け抜ける。都会の歩道は、道の幅が広いが、人が多いのだ。スピードを落とさずに、なんなく駆け抜ける。

これだけのスピードで走ってるにも関わらず、誰も感心を寄せないのは、彼が認識阻害魔術を展開しているからである。

「はい、到着。」

五秒の余り。といつても、シフトの五分前であるが。

「ひたにちは。シフト交替ですよ。」

「あ、ありがとね秋吉君。」

女子のバイト仲間とシフトを交替し、制服に着替える。流石に着ていた真っ赤の大きなフードつきパーカーはおかしい。

因みに、彼は結構お客さんから好かれる。

というのも、彼は童顔で、男だが、女子みたいな…へたな女子より可愛らしい顔立ちをしているからである。日頃はコンプレックスの源があるので、フードを深々と被っているのだが。

「いらっしゃいませ。」

コンビニ、女子高生一人。俺を見るなりひそひそ話を始めた。だから嫌なんだ…。女顔でアルトの声で中身は男。おかしいだろ？…まあ、営業スマイルは崩さんけどな。なんやかんやで、俺も役に立てるわけだし。

さて、彼がレジ打ちを始めて五時間が経過し、もうすぐシフトの時間が終わるくらいの時間のことだった。なんか、いかにも怪しそうな真っ黒いコートに、サングラス、マスクを着けた中年男性が入ってきた。見るからに怪しい。よくみたら、銃をポケットにしまっている。

でも、この手の輩は刺激し過ぎると、かえって危険だ。興奮して銃を乱射しかねないからな。

「おいお前ら、手をあげろ。さもないと撃つぞ…。」

男は行動にでたようだ。

よく見ると、瞳孔が開いて血迷った眼をしている。恐らく薬物中毒者の末期だろ？。めんどくだ…。

「おこ、セレの女ーー金を持つて」

はて、女は居ないんだが…。

「お前だよお前ーーわざとこせがれノロマーー。」

……ビハツハ、俺のよつだ。穩便にいく作戦変更。ボコる。

「お、おっちゃんのか女アーー銃だぞコリカアーー。」

「…中年は黙つてりよ。」

「ああーー？マジで撃つぞコリカアーー。」

カウンターを越えて、男との距離一メートルといつたところか。

「秋吉君ーー下がりなさいーー！」

店長の制止も俺には聞こえない。

男の指が引き金にかかると同時に地面を蹴り、鳩尾に蹴りを入れる。かなり手加減したので一メートルしか飛ばなかつた。

「おい、俺が女に見えるかコリカ。」

「どけよクソッ！ヤクが切れてんだよーー離せ畜生ーー。」

かなり息が荒い上に、薬物の匂いがする…。

不意に、嫌な予感がして、後ろに飛び退くと同時に、爆音が炸裂。

そして、銃弾が俺が居たところを通りすぎた。

速度は普通の拳銃程度だったが、油断していた。二人組だったか…。片方は、腹を押されて立ち上がり、拳銃を俺に向かた。もう一人は、客を人質にとつていて。

渋々と手をあげて下がった。

やろうと思えば、人質の解放と、二人相手の立ち回りくらいは楽勝なのだが、如何せん現代社会では不可能と思われる行動をとることになるから、俺が色んな意味で怪しまれる。

「へへへ…」これでテメエも手を出せないな。」

「……邪魔。」

いきなり人質を持った方の男が吹き飛ばされた。

「加減間違えた。」

「おーい、注目集めてどうする。」

……嫌な予感がするのは俺だけだろうか。どうも、聞いたことある声が二つ聞こえた気がしたのは…。

「あー、すみません。肉まんを……………。夜哉…えつ…えつ…えつ…えつ…」

「あ、夜哉だ。一口ぶりー。」

……間違いないな。

いや、幻聴の可能性がある。無視しよう。

「肉まん三個でお会計は750円になります。」

「無視すんな阿呆。」

「……幻聴。」

「咲魔、殴つていいか?」

「ふえー?えつと……あー。ゴホン。良いわよ。」

「良いのかよ……。」

今ので確信したので紹介するが、肉まんを頼んだ方は宇津宮咲魔。片方は、宇津宮シキ……と名乗ってたな。今もそれで通してるだろ?。確信は無いが。

ふと、視点を移動すると、男一人は氣絶してこりよつだ。

「店長、すみません。あの男一人に救急車と警察をお願いします。」

「え、ああ、うん。わかったよ。」

「おお、なんか店長バシってるみたいだ。」

「秋吉君はもうあがつていいよ。疲れただろうしね。」

「あ、ありがとうございます。」

時給もしっかりといただいて、カウンターを出た。

あ、店長？え？廃棄の弁当くれるの？ありがと。

「で、なんでお前らが居るんだ？」

本日一番の不思議である。

「さひ…氣まぐれよ氣まぐれ…ねえ、シキ…」

「えひ？あ、うんうん。そひそひ。氣まぐれ。」

なんだ、氣まぐれか。わざわざ結界を越えて」苦労ないひた。……ん？そういえば、違和感があると思つたら…。

「一人とも伸びたか？」

「まひ…まあ、ね。ちよひとな。」

「変…か？」

「いや、悪くないぜ。」

変といつよつ、大人びたなと俺は思つ。咲魔も髪を下ろしてゐし。

一人がホツとしたのは言つまでもないのだが。

「お前ら、家はど」なんだ？」

「すぐ近くのアパート。」

すぐ近くのアパートつて…俺んちもすぐ近くのアパートだし…アパ

「ト、一つしかないし……。  
まかさな……。

さて、なんやかんやですぐ近くのアパートに着いた。当然一人も着いてきた。

階段を上がる。着いてくる曲がる。着いてくる。扉を開ける。隣の扉を開ける。

「……お隣さん？」

「マジかよ……まあ、夜哉ん家に遊び行きやすいからいいけどな。」

逃げ出したい気分でドアを閉める。

取り敢えず窓」「つと、ベッドにダイブ。

ガチャ……ガチャガチャ……カチヤン。

ん?今、扉が開いた音が……。

「やつほーーー!」

「ほぐおつーー!」

背中に鈍痛が走り、変な声を上げてしまった。

この声も聞いたことあるぞ……。いや、鮮明に覚えてい

「そ……御、ねえ……。」

「あれ?夜君どこの痛いの?お姉さんが看病してあげようつか?」

「なにがお姉さんじゃ……俺が年上だ！」

「もひ、夜君の意地つ張り。」

水無齋。元は人間だが、二十歳で妖怪になる。元はと言えば、俺が気まぐれで助けた村娘的な奴なんだが。どうしてこう、なつくかね…。因みに大人になって、胸ばっかりデカくなりやがったし、ショートヘアにしてから若干大人びた。なので、何故か年上の俺を可愛がる。因みに俺が妖怪になつたのはギリギリ十九だ。

「うふふ。夜君かわいー。」

なんなんだこいつは…。俺が痛さでもがいでる上から覆い被せるようなかつこつである。端から見たら俺が押し倒されてる風だ。しかもこいつ、風呂上がりなのか、熱いくらいである。  
ん?」じつ…まさか…。

「下着じやねえか!…」

「あは、今さら気づいたつてもつ遲い。」

そう、下着なのだ。まさかのブラとパンツのみ。しかも裸足。

「かーえーれー!…」

「いーやーだー!…」

なにが嫌だか…。俺的には…その…素肌を当てられるといつ…理性つてもんが危険に晒されるんだが…。

「「仰ああああつ……」「

俺の家のドアが盛大に吹っ飛ぶ午後七時。ドアの修理びつつかな……。

「あー、咲魔とシキだー。」「

「あーじゃないわよ……早く退きなさい……そして、服を着なさい……」「

「着てるじやん!!」

「パンツは服じやねえ。常識的に。」

うむ、巨乳が頭に押し付けられかつ素肌が引っ付く俺にしてはなかなか冷静なコメントだな。

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん!!」

「パンツだろっ!』

シキ、いい突っ込みだ。

「ど……とにかく窓は夜哉から退きなさい……。」「

「えー、やだー。夜君のお嫁さんは私なのー。」「

「俺は痴女と結婚する趣味はねえよ……。」「

やつとのことで窓のホールドから抜け出せた。

はあ、前途多難だな……。

## プロローグなんて無かった（後書き）

わけのわからない日常となっていましたが…まあ、後々展開していくかも  
す。

不定期更新は気にしないでくださいーーー！  
これからも宜しくお願いしますーーー！

**職業・魔装探偵！？（前書き）**

はい、文章すくないーい WWW

## 職業・魔装探偵！？

夜哉 side

午後七時。女子（約一名）の痛め付けとも思える過度のスキンシップのお陰で肉体的にも精神的にも過大なダメージを負った俺は、取り敢えず英気を養う為にゲームセンターに向かうこととした。家の近くにゲームセンターがあるので、結構快適である。まあ、距離はどうにでもなるがな。

そういうえばと、宝くじが当たっていたのを思い出して、五百万円を無駄無く稼いでいた。噂では、数学者は、宝くじの当たる確率は、分母が余りに大きすぎるので、当たる確率が二倍になつたとか聞いても当たる確率が天文学的数字なので買わないらしい。ちょっとした豆知識。

ここで、毎度毎度宝くじを買つてゐる俗に言つ、宝くじユーザーの皆様に心からお詫び申し上げたいのだが、実はちょっとした解析をして居たのだ。どこの宝くじで、何番目に引きにいくと当たるかを解析した結果だ。

まあ、チートだな。

つづ訳で、やたら所持金が多い。

なんだかんだ歩いて十分程度でゲームセンターに到着。閉店は十一時だから長居はできないな……。

ふと、眼をやるとこの時間には珍しく、人が多かつた。なんでも、格闘ゲームに入だかりができる。

それも、片側のみ。

片側はよく見えないが、人が座つてゐる。

画面を注視する。今座席に座つたインドア系の男が乱入した。

そこからは、ある意味リンクだつた。

コンボが途切れないのだ。俺は結構このゲームをやるのだが、こんなにコンボを続けるのは至難の業だ。仕様として、コンボが十を越えた辺りからボタンを押すタイミングが若干小さくなるし、上級者でも動きが力ク力クになる程操作が難しい。画面のキャラクターは、着地の隙を攻撃でカバーしたり、攻撃の隙を回避でカバーしたりと、動きに無駄がなくなめらかである。

ハツキリ言おう。やりこみ過ぎだる。

こんな動き出来るのは正直俺だけだと思つていた。

ちょうどビダチョウ俱乐部のように変な譲り合いが始まったので、俺がプレイするのは容易であつた。

「おもしろい。連勝記録を破つてやろうじゃないか。」

キャラクターを選択する。いつもどおり、ナイフ使いの男。対して、相手は巨大な大剣を持った女。

まもなくバトルが始まった。

開始と同時にダッシュで接近される。

俺は動かずに接近を待つ。

予想通り、緊急回避で後ろに回つた相手は、大剣を薙ぎ払つた。

絶妙なタイミングでしゃがみ、そのまま上に攻撃を入れる。しかし、そこには既に居なく、技の出の早い蹴りを出してきた。システム的に回避は不可能なので、素直に受け、回数制限のある、ボムと言う範囲攻撃で技の出を潰すと、よろめいてる間にナイフの連続攻撃を入れる。二十コンボ繋がると、絶妙なタイミングで抜け出される。

そこからば、まるで巨剣を携える重量級とは思えないようななめらかな動きで俺を翻弄する。

俺は最大の反射神経を集中させて腕を動かすが、あることが起きた。

「なつ！？処理落ちいい！？」

俺のキャラがバグって動けない間になんと連續四十コンボを鮮やかに決め、決着がついた。

周囲がどよめいた。そりやそうだな。人間にゲームを処理落ちさせる程の速度はだせねえしな。

「ふーー。やっぱ夜哉は強いね。」

「なんで居るんだよシキ。」

「いやー、ゲーセンは好きだからねえ。まあいいや。一緒に回りつつ

よーーー

「うよーー何故手を引く何故！？」

「いーじゃんいーじゃんーーあ嫌かな。」

「いーつ…いや、別に嫌じゃないが…。」

俺には嫌だと「う」とは不可能だ。考えてみる、背の小さい女の子が上目遣いで俺を見てるんだぞ…あれ狙つてんのかな…。関係ないか。

「なあ夜哉、太鼓やろつーー！」

「おひ。いいぜ。」

そういうえば、先程から視線が…。嫉妬と羨望の眼差しを感じる。チラリと振り返ると、男どもが鼻の下を伸ばして食い入るように見ていた。

嫉妬つつとも、俺たちは友達同士な訳で、決してカップルではないぞ。

男どもは、太鼓を叩く度に揺れるシキの胸を見ているのだ。それを見ている女子からの卑下するような視線が注がれているのだが。

さて、太鼓も終わって、UFOキャッチャーでもしようかと並びっこりで、ヤンキーみたいな男（所謂DQNといつやつだ）が近づいて、話しかけてきた。

「ねえねえ君たちさ、俺と遊んで行かねえ？」

さて、シキがナンパされました…ん？君たち？  
俺も入つてんの？まさか…な。

「あ…あはは。お兄さんそれ爆弾投下。」

「え？お嬢ちゃん達遊ばない？」

「お兄さん命は大事にね…。」

「へ？」

怒りは頂点に達した。今こそ狩る頃合いか。

「……俺は男だ。」

赤の目…妖怪の目になる。普段は苦労した末、黒の目になれるようになつた。

赤の光る目を直視した男は恐怖で足がガタガタと震え始める。

「は……はひつ……」

目を黒に変化させる。

「まあ、ナンパする相手は選べよ。」

「す……すみませんでした!..」

すたこらさつさと逃げるように去つていつた。

まあ、あの程度ならそこまでキレイなわな。今のは脅し程度だし。

というか、俺が仮に女子だとしても、女子一人同時にナンパとは、どんだけ欲求不満なんだろ?…。考えちゃ駄目か。

UFOのキャラクターは苦手なんだ…取り方がわからない。いい感じにはまつてもアームがゆるゆるだからすぐ取り落とすんだよ。結局俺は下手すぎて何も取れなかつたが、シキは大きなぬいぐるみを取つていた…五百円で。

んで、もちろん俺が荷物持ちな訳である。

景品が大きすぎたので、このままゲームをし続けるのもアレなので、

帰る」とした。

とくじだつといつ事もなく帰宅。

ガチャリ

「お帰りなさい……私にします？私にします？それともわ・た・し  
？」

バタン

ガチャリ

「お帰りなさい私に（　）」

バタン

俺は見てはいけないものを見てしまったようだ。

「いやん、夜君のいけずー！」

ジシコロミ所は満載である。

まあは、……。

「選択肢が無い。」

「一個だけあるよ。」

一個だけなんぞ選択肢に入らん。

「遊んでないで入ってきて夜哉。」

咲魔すら勝手に家に上がる始末である。鍵は掛けたはずなんだがな。  
仕方なく窓のハグを回避して入つていくと、後ろからシキが、先ほど取つた巨大なぬいぐるみを抱えてきた。

「で、状況説明するんだけど……。」

「おお、なんて優しい。今まさに俺が聞きたいことが状況説明なんだ。  
でも、その前に。

「窓、下着は止めよ! ばっさ!」

「着てるよ。」

薄手のカツターシャツだけな。それじゃあブラは隠しきれてないと  
いうか、見せる気満々だろう。透けて見えるし。てか、ズボン穿いて  
ないのが一番の問題だろう。

「うー 穿けばいいんだしょー。夜君のバーカ。」

そして、穿いたのはズボンではなくどこからともなく出したミニス  
カート。残念ながら隠そうとしているのでパンチラビニカルパン  
モロである。

「ホンと一つ咳払いをして咲魔が切り出した。

「えっと、只単に、大神から飛ばされたのが現代だったから、ここに居る訳だけど。大神の命じによつて。仕事をすることになつたの。

「

「仕事？俺はバイトやつてんだけど。」

「魔装探偵。夜君には悪いけどバイト止めてもらわないと。いけないよね。」「

「そう。悪いけど、大神には逆らえないから。シャルと朝儀は今仕事のはず。」

「で、仕事内容は？」

「普通の探偵と変わりなかつたりするけど、怪奇現象を止めたり、妖怪の討伐とかも入るわね。」

う…確かに大変そうだな…。バイト辞めないとどうしようもないぞ…。店長に謝らないと…。

あーあー。俺の平凡はまびこへやう…。

「またこの剣で戦えと？」

「無理強いはしない…でも、手伝つてほしい。」

「仕方ないな…店長に謝つとくか…。」

三人の顔がパツと明るくなる。俺が居るだけでみんな明るくなれるんなら、俺だって一肌脱ぐつじやないか。まあ、無理なもんは無理だけどな。

「で、朝儀とシャルはどんな仕事なんだ？」

「あー、なんでも、とある鏡がいきなりにもしてないのに勢いよく割れたらしい。不自然過ぎて怖いから依頼されたわけよ。まあ、大体そんなもんよ。」

鏡が勝手に割れる……。別に身に覚えがあるわけではないが、なんだろう」の悪寒は。

## 職業・魔装探偵！？（後書き）

鏡が勝手に割れる…まあ、ネタですよね。ん？何のネタかつて？…。

次回からは、オンドウル侍さんとのコラボで、オリジナルキャラ、アレンが登場します！！

## キャラクター紹介（前書き）

はい、キャラクター紹介です。は最大で五つ、最低で一つです。  
不備な点があれば言ってください。シキがお応えいたします。

## キャラクター紹介

名前：秋吉夜哉  
あきよし よるや

性別：男

能力：反射と向きを操る能力

武器：赤桜・式式【片手剣】  
せきおう・しきしき【へんてけん】

特技：反射神経、数学全般

趣味：ゲームセンターに籠ること、フリーランス

好き：空気が旨い場所

嫌い：女顔のことにふれるやつ

危険度：

友好度：

概要：本作の主人公。誰に対しても友好的で、社交性に優れるが、色恋沙汰に関してはかなり鈍感。だがモテる。何故かモテる。

容姿は、人間から妖怪になつたため19歳から変わっておらず、さらに女顔である。パツと見は女子にしか見えない容貌は、本人はかなりのコンプレックスのようで、いつも紅いパークーの大きなフードを深々と被っている。

だが、黒のやや長めの艶やかな髪は時として凛々しさを醸し出す。

普段は、赤い目を、魔術で黒に見せている。

人間の時は、数学の教師を志していたが、妖怪化に伴い、夢を諦めるが、実際本人はどうとも思っていないようだ。

能力については、主に向きを操る力を使い、反射の能力は、『全反射の籠手』という武具を呼び出し、装着すると使えるようになる。触ると、あらゆる攻撃や、魔法や、呪術。その他さまざまなものと反射させる武具である。

対策法としては、まあ人間に對してかなり友好的なので対策はとる必要はないが、怒らせたら大変である。怒させる方法：書くのもどうかと思うが、仲間意識が強く、仲間を馬鹿にされるのを嫌うため、まあお分かりだろう。怒らせたら殺されるだろうな、精神的に。その時は危険度が になるので注意。

名前：うつのみやさくま 宇都宮咲魔

性別：女

能力：無限の創造世界 固有結界

武器：刈り取る死痛の一いつ鎌かじとるしつうのふたつがま【双鎌】

特技：武術全般

趣味：戦闘、料理、運動

好き：夜哉

嫌い：夜哉にあだなす全ての存在、大神

危険度：

友好度：

概要：転生してもうた！！シリーズの主人公。夜哉とはひつてかわつて社交性が高くはない。語尾が「～わ。」とか「～ね。」になっている。元は、ロリー・タ・サイズの少女の姿だったが、大神を脅し大神にお願いしたら運良く20歳くらいの身長にしてもらつたので、髪をポニー・テールをとっている。

革新者という位置付けで、進化した人類である。能力を使うときや、怒ったときは黒の瞳が光輝く黄金に変わる。そして、身体能力が上昇する。

危険度が高いのは、若干戦闘好きで、武器はどこかしら持ち歩いている。（持ち歩いていなくとも創造できる。）なので、喧嘩を吹っ掛けたら、人間だと半殺し、妖怪だと割殺し、死徒だと殲滅する。くれぐれも怒らせてはいけない。地球そのものがどうなるかしれない。幸いそこまで沸点は低くないというか結構高い。

髪は黒で、赤の小さなりボンを左右に二つつ着けている。目は黒。因みに胸はそこそこデカい。

能力、『無限の創造世界』は、固有結界というそれだけに特化した魔術回路であつて、世界を塗り潰すことができる。

無限の創造世界と言つものは、簡単に言つと自作爆弾の無限倉庫である。

物理的なものが空想が現実になる能力で、敵を殲滅するために剣をばらまいたり、小腹を満たすためにお菓子を出したりと使用用途はさまざまである。

また、能力を使わずとも、大抵の魔術が使える。

対策法としては、まず怒らせてはいけない。絶対にだ。もしキレさせることがあるものなら、自分の周りに大量の剣が現れ、ジ・エンドである。

名前：シャルロッテ・フラー

性別：女

能力：なし 魔術は使える。

武器：銃器全般

特技：超遠距離狙撃

趣味：夜哉の背中を遠距離からスナイパーのスコープで眺めること。

好き：夜哉、銃器

嫌い：弾詰まり

危険度：

友好度：

概要：言わずともがな二人目のヒロイン。夜哉に惚れている。真面目な性格だが、生真面目という訳でもなく、社交性に優れ、誰に対しても敬語であるが、仲間内では名前は呼び捨てにしている。

外見年齢は17歳くらい。髪は金色のウェーブがかつた長髪に、栗色の瞳を持つ。

因みに胸は小さくはない。

随分前から咲魔と行動を共にしていて、盛大にボケるチームの良心としても活躍。

能力はないが、魔術が使える。しかし、卓越した狙撃センスで、遠距離からの精密狙撃は、幾度も活躍している。さらに、属性魔術で弾丸に属性を付加することも可能である。

体力的には、高いものの他のパーティメンバーには見劣りする。対策法は、取り敢えず敵に回したら厄介である。視認不能の距離からの精密射撃は狙われる方にとつてはかなりの神経を磨り減らして回避に徹してもギリギリ急所から逸れる程度であるから、敵に回すのは危険である。しかし、友好的で基本的に喧嘩はしないので安心である。

名前：水無窓

みずなしそら

性別：女

能力：幻惑能力

武器：素手

特技：家事全般

趣味：ショッピング

好き：夜哉

嫌い：勉強

危険度：

友好度：

概要：三人目のヒロイン。夜哉に對してド変態。どうしてこうなつた…。

まあ、本人としてはスキンシップなだけなんだろうが。過度すぎる。その強さイコール夜哉の大好き度と考えれば納得はいくだろう。気づかない夜哉も夜哉である。

容姿は、空色のショートヘアに、随一のスタイルと、少々女の子だと嫉妬してしまう体型である。胸は適度にデカい。

さらに、20歳から妖怪かしたため永遠の20歳である。羨ましい。因みに、妖怪化に伴い黒の長髪から空色のショートに変化したのである。眼の色は緋色。

夜哉に対しても姉さんの態度をとっている。確かに外見的に丁度良いが…。因みに、夜哉のことを「夜君」と呼ぶ。

能力に関しては、幻惑能力である。幻覚を魅せたり、幻を出したりと、使い勝手が難しいが強力な能力である。最近は夜哉にばかり使っている。効果は媚薬と同じ。しかし、使う度に跳ね返されている。迷惑なだけである。

結局、能力は戦闘に余り用いない。体術での攻撃を主にするが、威力は高いのは仲間内で体術ができる（シャル以外）に教えてもらい、天才的で驚異的なスピードで習得していく、体術は随一の強さになるまでに成長。

対策法としては、近寄らないのが賢明だろう。ある程度の剣の達人が真剣を持って勝負を挑んだとしても惑わされて終わりか体術で完膚なきまでに打ちのめされるだけだ。

刺激さえしなければ安全なので、普通にそつとしておこう。余程不機嫌でなければ襲つてこないはずだ。襲つても、お団子奢つてあげると言えば大抵機嫌をなおす。

性別：女

能力：体感重力を操る能力

武器：紅球【武器ユニット】

特技：料理、運動

趣味：散歩、ジョギング

好き：夜哉

嫌い：取り敢えずヌルヌルしたもの全般

危険度：

友好度：

概要：四人目のヒロイン。夜哉の妹ではなく、夜哉そのものの裏の存在。戦闘時には残虐性を發揮し、咲魔とタメを張れるだろう。容姿は、紅色の髪で髪型はおさげにしている。目は赤色。胸は…触れてはいけない。

平常時は、先程記した通り友好的であるが、戦闘時に危険度がになる。ので注意が必要である。能力について、体感重力といつのは、自分にかかる重力のことで、地球から受ける重力を無理矢理引き剥がして、方向を自由自在に変えることができる。例えば、真横に壁があつたとする。それに向かって重力の向きを動かせば、壁に立つことができる。と言つものだ。

武器ユニットの紅球といつものは、元は半径10?程度の真紅の球

であるが、念じて魔力を通すと、形状を変化させることができるという万能武器である。もちろん球のまま投擲にも使えるし、遠隔操作も可能である。

対策法としては、まずは友好的な態度をとり。刺激したら速攻戦闘モードに入るからである。敵に回すのは危険である。肉片さえ残してもらえないかもしれない。まあ、弱いもの苛めはしないだろうが…。

ここに万年筆を止めた。仲間にについての書物を書こうとしただけだからな。自分のプロフィールなんて書くのもどうかと思うしな。でも、なんか寂しいよな。やっぱり、自画自賛も甚だしいが、自分のプロフィールを書くことにする。若干恥ずかしいが仕方がない。これは私の宝物にする予定だからな。

名前：宇都富シキ（うつのみやしき）

性別：女

能力：<sup>ナノプラスチ</sup>獣化

武器：近接武器ならなんでも。

特技：武術全般

趣味：ゲーム関係

好き：夜哉

嫌い：大神

危険度：

友好度：

概要：この書物を書いている当人。最後のヒロイン。

社交的でどんな人にも友好的な態度をとるが、内に秘めた獣の闘争心は拭いられない。ビーストという種族で、特殊能力としてナノブラストが行うことができる。容姿は、黒の長髪で白の大きな帽子を被っている。耳は所謂獸耳で垂れている。そして、瞳は真紅だ。外見年齢は18歳。胸は窓に次ぐ。

武器は全て使用可能で、特に二刀流、槍、二爪をよく使用する。レベル的にはかなりの使い手でも軽くあしらうことができる程度。腕力には自信あり。

夜哉に惚れていで、一緒にゲームはするが、思いは伝えきれなくて悪戦苦闘中。といふか早く氣づけバカ。

対策法としては、取り敢えず友好的なのでじやんじやん友達になつてもいっこうに構わない。

よくゲームセンターで格闘ゲームをするので、乱入してみよう。数秒で倒されます。自分で書いて恥ずかしくなった

「ふうー、なかなか疲れるなこれ。」

自分のプロフィールはやたら短くなつた気がするが気にしてはいけない。恥ずかしいのだ。

万年筆はもう片付けて、この書物のタイトルを毛筆で書くことになった。

水を注ぎ、墨をする夜の1時。

「よし、書くか。」

心頭を滅却して一文字田に氣合いをいれる。

静かな筆の音が響く。

ただ、たらたらとたらららと流れようつなりリズムに乗つて。  
そして出来た文字は。

【夢幻史記】

## キャラクター紹介（後書き）

さて、プロフィールも終わり、本編に入ります。  
前に言ったコラボは次の一話からです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1904z/>

---

INSANITY

2011年12月16日20時52分発行